

入院分娩・母乳育児相談

ともし助産院

助産師 伊藤 朋子

〒981-3124

仙台市泉区野村字野村95-6

TEL 022-772-5960

Fax 022-772-5961

メール tomo@tomo-j.jp



2009年



平和で穏やかな歳となりますように。
すべてのこどもたちと、お母さんと家族
が、健康に幸せに暮らせますように。
お産の神様、どうぞ、お守りください。

9月に400人目の赤ちゃんが生まれました。

開業400人目の赤ちゃんは、お姉ちゃんにそっくりの、ぴかぴかに元気なかわいい女の子でした。パパのウキウキ・はしゃぎ様は、そばで眺めているだけで、とても幸せな気分でした。

「助産院という小さいユニットで助産師が継続して、家族を支援することこそ、安全で幸せなお産の形だ。私は人間分娩装置になる。」という信念のもと、元気なママと元気な赤ちゃんだけをセレクトして、お産にのぞんでいるはずの助産院ですが、救急車や病院のお世話になること数回。そのたびに眉間のシワは深くなり、白髪も増え、「寿命が縮まる！」とぼやく。どうして、そんなにお産に魅せられるのか、自分でもよくわからない。

「お産は怖い、怖い。」と言いつつも、新生児の魔力と、産婦さんや家族の喜ぶ顔、自信に満ちて輝く若い女性たちの姿に、引き寄せられる。つまり、何よりも好きなことを仕事にしている幸せ者です。

10人の助っ人助産師に恵まれ、お産には助産師3人で取り組む体制を組んでいます。深夜・早朝・休日・悪天候にかかわらず、「お産だよ〜。」のメール1本で、ぎらぎら・ルンルンした足取りで助産師たちが助産院に集結します。お産好きは、私だけではないのです。お産を続けている先生たちも同じ気持ちなのだと思います。



1晩に3人生まれた日がありました。

1週間に8人生まれた週もありました。



嘱託医の高橋医院が改装に伴い、桜ヒルズウィメンズクリニックと、素敵に名称変更されました。病院のホームページにも、助産院の連携医療機関であることを紹介していただきました。結城産婦人科医院も医師2人体制となられ、とてもこころ強いです。

3月には、神戸での助産学会に参加しました。久々に飛行機に乗り、遠出を楽しみました。4月、「妊婦健診助成券」が仙台市は10枚となり、助産院でも使用可能になりました。当初「助産院では使用できない。」というものでしたが、「そんなのおかしい！」とお母さんたちが声を上げ、それに行政が応えてくれました。いまだ、助産院での妊婦健診では助成券の使えない市町村がありますが、だんだん変わってほしいなあと思います。

11月～12月は、宮城県主催の助産師30日間研修があり、副院長の中村助産師が参加しました。看護師業務をしている助産師を掘り起こし助産師外来開設支援をしようという県の企画でした。普段から妊婦健は行っている私たちがありますが、大学病院などの基幹病院で朝から晩までみっちり超音波検査研修、最新医療を学ぶというもの。研修好きの私たちにも、さすがに特別ハードな研修だったと思います。中村さんお疲れ様でした。

2009年1月、産科医療保障制度が始まります。重度の脳性まひの赤ちゃんに、お見舞い金を出す保険制度です。赤ちゃんの病気はそれだけではないし、果たしてそれで医療訴訟が減るのか、産科崩壊阻止のカギになるのか、家族は幸せになれるのか・・・、ともあれ、まずは多くの方の尽力で助産院も含めた形でスタートしたことを喜びたいと思います。

これからも応援お願いします。私たちも精進し、頑張ります。



今年もよろしく
おねがいします。



高森消防署・加茂出張所の救急隊の皆さんと
9月に救命研修を行いました。



崖の上のポニョ

大好きな宮崎アニメ。私の一番お気に入り、魔法の宅急便。エンディングのところ、パンやおソノさんの夫が、哺乳瓶で赤ちゃんにうれしそうに授乳してシーンが唯一、気に食わない。赤ちゃん＝パパ・哺乳瓶という構図、ああ、宮崎さんあなたもか！とガッカリな1コマなのでした。そういえば、宮城県の乳幼児医療費助成のポスターもパパが哺乳瓶授乳をしていて、ママが傍らで微笑んでいるイラスト。M水族館にいったら、「イルカは哺乳類なので、お乳で育ちます。」という掲示に、イルカが哺乳瓶で赤ちゃんイルカに授乳しているイラスト・・・。あれれっ??ももちろん、人工乳が必要なこともあるけど、なにかがおかしいと思いませんか？

夏休み、甥っ子と観にいきました。崖の上のポニョ。洪水になって町の人たちが、ボートに乗って避難してきます。赤ちゃんが不機嫌に泣いています。さかなの子から人間になったポニョは、赤ちゃんを慰めようと、ポニョが大好きなサンドイッチを差し出します。赤ちゃんのお母さんは言います。「赤ちゃんはサンドイッチ食べられないの。私にちょうだい。そうするとおっぱいになるの。」いいね～。ジブリ！さすがに勉強していますね～。きっと「災害時の母乳支援」のガイドラインを見てくれたんだわ。とにんまり。ポニョ全体のストーリーもさることながら、粉ミルクの救援物資が届くシーンではなく、ママに食べ物あげて、赤ちゃんには母乳をあげ続けようという災害時の母と子の育児支援メッセージを、映像にしてくれたことをとてもうれしい！と、母乳オタク伊藤は思いました。

実習生がいっぱい！

来年は、助産・看護学生が年間100日近く実習にやって来る予定。スタッフ助産師が交替で学生指導を担当しています。通算150人以上の学生が、とも子助産院に足を踏み入れることとなります。地域での助産師の活動を体験するという目的とともに、病院の産科閉鎖に伴いこれまでのように母性看護の臨床実習の場が確保できないという事情もあります。後輩を育てることは、産婆という伝統職を伝える者の使命の一つ。病院の実習とは違い、お産の少ない助産院には、一人も赤ちゃんのいない日もあります。果たしてそれで何を教えるかと迷いもありますが、学生さんたちにとって、職業人として、家庭人として働き続けることの意義を感じてほしいと思っています。生活者の目線で考えることを学んでほしいと思っています。

「最近の学生ってよく勉強しているんだなあ。」と、関心します。自分は、そうとうアホな学生だったので、偉そうなことは言えません。お母さん方には、ご迷惑なることもありますが、どうか温かく見守ってあげてください。

よろしくおねがします。



助産院スタッフと、応援団の仲間たち

プルミエール 私たちの出産

フランスで作られた、お産の美しいドキュメンタリー映画。7月に仙台で上映されたばかりなのに、もうDVDが出ています。

海で水に漂いながらイルカとお産してるメキシコの人や、無介助出産をするネオピッピーのひと、誕生死だった砂漠で遊牧民のお産、パリのダンサーの幸福な無痛分娩、インドの貧民窟のお産、アフリカのマサイの女性、日本の吉村医院のお産。10人の誕生が、日食の映像との重ねられ、どれも感慨深いのです。

吉村医院と言えば、有名な薪割りエクセサイズをする妊婦さんの姿がてていました。吉村医院のお産が、日本の一般的なお産の姿でないように、ほかの9人のお産も、それぞれの国の平均を表しているわけではないのだらうと思います。

泣けたのは、シベリアのエスキモー(?)の女性の帰宅シーン。遠くの病院での帝王切開後、氷の上のキャンプへ、医療ヘリコプターで送られ赤ちゃんと一緒に帰ってきます。産婦さんは、モンゴロイドなのだけど、医療者はみんな白人。医療者と産婦さんがコミュニケーションできているのか、どうなのか、映像ではよみとれなかったけど、どんなに医療施設が整っていても、見知らぬ人のなかで一人で子供を産むのは、さぞかし不安だろうなあと思いました。自宅出産は禁止されているのだそうです。氷の上を移動する原始的な狩猟生活とハイテクのヘリとの対比がなんともいえず、無事に-50℃の氷の村に帰ってきたときは、ほっとして、涙が出てしまいました。帰属意識が強いのは、日本人ならではののでしょうか。やっぱり、お産は文化そのもので、日常の暮らしや信条と切り離してはいけないものと感じました。

1日に120人うまれるというベトナムの病院は、少し前の日本の病院を覗くようでした。ギューギューのベットのわきから廊下まで、家族がごろごろ寝ていて、分娩監視装置と点滴、プライバシーのかけらもない環境。「これが、科学的で近代的なのっ！」という感じ。大変ですね～とは思いましたが、孤独なお産をしたエスキモーのママよりは、家族や同じ文化の産婦達の中にいる分、安心してみていられました。

難産で赤ちゃんをなくした砂漠の産婦さん、とても気の毒だったけど、自分の文化の中にいる限り、ともに悲しむ家族や仲間がいて、次への道しるべもあるように感じました。

映画のあと、お茶しにいった先で、助産学生らしい若い3人組が、近くに座っていました。そして映画の感想を熱く語りあっていました。日本の未来もすてたもんじゃないな～とおもい、ニカニカしてしまいました。(笑)

